

Relation **医療連携**
をめざして
～近隣医師会からメッセージ～

今回の
ご登場は



渋谷区医師会長
山崎 隆夫

自分の科目以外は、他の適切な先生に紹介できること。
いつでも診てくれる。
毎日相談できる、また、時間外でも相談できる。
社会の仕組みを良く知っている。
介護保険や、産業医、学校医、予防接種の仕組みなどを良く理解し、患者さんからの相談に答えることができなければなりません。
社会的な人間性も備えている。
在宅医療や介護保険で、他の人々の信頼を得ることが必要です。様々な職種の人々と協調して仕事をします。

多くの渋谷区医師会員の先生は、地域における「かかりつけ医」としての自覚を持って、地域医療に取り組んでおります。

創立60周年を迎える渋谷区医師会

渋谷区は、昭和7年に当時の渋谷町、千駄ヶ谷町、代々木幡町が統合して成立し、今年75年目を迎えます。人口は約20万人、区の花は「花菖蒲」、区の木は「けやき」が定められております。

区内には、日赤医療センター、都立広尾病院、JR病院などの大病院があり、近隣区にも、大学病院をはじめとした大病院が数多くあり、医療環境としては大変恵まれたところです。

渋谷区医師会は、会員数500余名を擁する大きな医師会で、まもなく創立60周年を迎えようとしています。

「かかりつけ医」としての役割

「かかりつけ医」という言葉にどういうイメージをお持ちでしょうか。言葉の響きから、身近な家庭医という言葉が思い出されますが、大きく5つの役割を持っていると思われます。

身近な存在である。

距離的にも近く、親しみを持てる。

なんでも診てくれる。

かかりつけ医と病院の専門医の連携

かかりつけ医と病院の専門医の先生方とのよく顔の見える連携がとれるように、学術講演会など、近くの病院の専門医の先生方を招いて研究会を行っています。

専門の先生の機能が十分発揮されるためには、その機能にあった患者さんを紹介する必要があります。また紹介患者の症状が安定したときは、速やかにかかりつけ医に返送し、また症状に応じて専門医に相談するといったこうした効率的な連携が患者さんにも喜ばれるようです。この連携をさらに進めて、糖尿病や高血圧といった疾患ごとに入院外来を含めた総合的な連携パス作りを構築する努力を行っております。

NTT東日本関東病院は、渋谷区とは距離的には少し離れていますが、様々な病院評価でも評価も高く、IT化の進んだ近代的病院との認識もあり、多くの渋谷区医師会の会員の先生方も紹介しているようですので、渋谷区医師会との連携も今後ますます深めていきたいと考えております。

Information

インフォメーション

いつか、どこかで役立つかも… —職員向けに救命処置講習会を開催—

今年度最後の一次救命処置(BLS/AED)講習会が、看護師、技師をはじめ、当院で働く事務職員を対象に、患者さんの救命処置など練習のできるトレーニングラボで行われました。

BLS(Basic Life Support)とは「特殊な機具や医薬品を用いることなく、医師以外の者でも行える心肺蘇生法」のこと。まず「救命とは」から講義が始まり、呼吸状態の確認方法やマウス-toマウス、胸骨圧迫心臓マッサ-ジ、そしてAED(自動体外式除細動機)の操作方法まで、わかりやすい講義が進みました。



そして、専門看護師によるデモンストレーションのあと実技を行いました。受講生は3班に分かれ、それぞれ専門看護師が付き講義で教わったことを行

うのですが、聞くとやるまで大違い。人工呼吸では手順通りやったつもりでも、気道確保がうまくいっておらず呼吸が入っていかなかったり、心臓マッサージでは強く押しすぎて「それでは骨が折れてしまいます」と言われたり…。みんな真剣にやっていますがなかなかうまくいきません。AEDも練習用ではピクとも動きませんが、本番は電流が流れた瞬間、患者さんは10cmも飛び上がるそうです。びっくりしないようにしなければ…。

病院の中なら知識のある人がまわりに大勢いるでしょうが、いつどこで自分がやらなければならない状況になるかわかりません。先日の東京マラソンでも心臓麻痺で倒れた人が消防士とAEDにより一命を取りとめたという例もあります。自分が行うことで「命」を救えるかもしれないのです。本誌13ページ「耳より情報」でも取り上げましたが、院内でのEMコールの対処だけでなく、医療に携わるものとして事務職員も含め、救急救命の知識、技術の向上に努めています。

“もしもし”をリニューアルします!

平成16年11月に創刊号を発行し、皆様のご支援のもと、当院広報誌“もしもし”も今号で15号を数えることができました。

医療情報の発信だけでなく病院と患者さんを繋ぐツールとして、また、様々な観点から医療を皆様とともに考えていきたい、と発行してきた“もしもし”ですが、創刊より2年半経ち、更に「患者さんのお役に立てる」情報誌、「地域医療、連携医療がわかる」情報誌、「患者さんがより参加できる」情報誌を目指し次号、リニューアルを行います。

新しいコーナーも検討中ですが、まずはファンも多い「川柳」を皆様から募集させていただきたいと思えます。外来、入院、病院、健康など医療に関することなら何でもOKです。また、次号にアンケートを付けさせていただく予定ですが、特集して欲しいことや、疑問に思ったことなどご意見をいただければ幸いです。

決まった書式はありません。川柳、ご意見ともお名前、連絡先を記載のうえ、“もしもしボックス”にお入れください。ペンネームでも結構です。

新年度に向け、新たな一歩を“もしもし”は踏み出していこうと思います。皆様のより一層のご愛読を、どうぞよろしくお願い申し上げます。
広報誌 編集委員会

編集後記 ▶「もしもし」Vol.15はいかがでしたか?楽しんでいただけたでしょうか?▶今年の冬は、あったかい日が多く、そろそろ各地で花の便りも聞かれています、風邪も流行っているようです。本格的な春が待ち遠しいですね。▶「もしもし」が目指している、より良い医療を行うための双方向コミュニケーションのためにも、皆様からのいろいろなご意見をお待ちしています。

広報誌 編集委員 塚本 篤子